

アウロストラヴェルソ

《トーマス・ステインズビー・ジュニア作 1 keyフルート》

18世紀のバロック時代、ヨーロッパにJ.S.バッハやヘンデルそしてヴィヴァルディといった音楽家たちが華々しく活躍していた頃のフルートといえば、この1キー（鍵）式の横笛——フラウト・トラヴェルソ——です。
王侯貴族たちに仕えていた宮廷音楽家たちは勿論のこと、音楽愛好家たちまでもが、この表現力豊かなフルートの魅力にとりつかれて演奏を楽しんでいました。
このフルートのために大作曲家たちは不朽の名曲を次々に作曲し、今日でもフルートの重要なレパートリーは、ほとんどこの時代のものといえていいでしょう。またJ.M.オトテール、M.ブラヴェ、J.J.クヴァンツあるいはF.ドゥヴィエンスといった名手たちも現われて、18世紀はフルートの黄金時代でもありました。

こうしたフルートの黄金時代となるためには名曲、名手たちだけでなく名工も当然居たわけで、主にイギリス、フランス、ドイツといった各国の様式の特徴を色濃く示すフルート製作家たちが、互いに影響し合い、豊かな表現力と、多彩な音色を極め、数多くの名器を残しました。

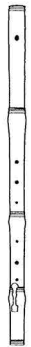
その中でも特にすぐれた本管楽器製作家のひとりとしてイギリス・ロンドンのトーマス・ステインズビー・ジュニア Thomas STANESBY Junior がいました。ステインズビー・ジュニアは1692年にトーマス・ステインズビー・I世（シニア）の息子としてロンドンで生まれました。父、ステインズビー・I世も17世紀最高の本管楽器製作家として大いに名高く、今日では彼の作った楽器がほとんど残っていないため、その名は伝説的でさえあります。
ステインズビー・ジュニアは父親の許で本管楽器製作のすべてを習得し、少なくとも23才頃（1715年頃）には早くも独立してリコーダー、フルート、オーボエ、バスーン等の製作家としてスタートし、ヨーロッパ中に、その名を轟かせるほどの名器を生み出していきます。

ステインズビー・ジュニアの残した本管楽器は様々なサイズのリコーダーやオーボエ、バスーンそして圧倒的な数を占めるフルートで、そのスタイルは父親の影響を受けた頃のオーソドックスなバロック・スタイルのものから、非常に大胆で独創的なスタイルのものまでいろいろですが、今日まで残されている楽器のほとんどは後者のそれに属します。

1754年62才で世を去るまでの製作期間は、およそ1750年頃までの約35年間で、丁度バッハやヘンデルの創作時期と重なり合います。
ちなみにドイツからイギリスへ渡ったヘンデルが管弦楽曲を演奏する時によく使用された本管楽器はステインズビー・ジュニアのものが多かったということです。
この35年という製作期間中には相当多くの楽器を世に送り出したのですが、今日ではそのほとんどが失われてしまい、その数を知る由もありませんが、残されたものの中でもフルートが非常に多く、それはバロック時代、リコーダーに代ってフルートが新しく登場したことに換るものと思われまふ。
ステインズビー・ジュニアの残したフルートは現在、約十数本が記録されていますが、そのほとんど全てが象牙製のもので、各ジョイント（継ぎ目）部分には金や銀のリングで美しく装飾されています。そして外観も前述のように、他の製作家には絶対に見られないような非常にモダンで、アール・デコ調の雰囲気さえ感じさせます。

このアウロストラヴェルソは、ステインズビー・ジュニアが最も円熟した時期に入った1730年頃の作品をモデルとして正確に再現したものです。有田正広氏のご好意によりご愛蔵のそのステインズビー・ジュニアの資料をご提供頂き、且つ製作技術の細部にわたり全氏ご指導のもとに完成したものです。ピッチはa=約415ヘルツです。

(注意) 本製品の汚れを除く場合は、布に石けん水を浸してふき取って下さい。ペンジン、アルコール類は決して使用しないで下さい。



○ 開 ● 閉 ◐ 半開 □ キー開 ■ キー閉 (注)：#、bは、バロック時代では現在の様な「平均律調律」ではなかったために、少しづつ音高が異なっていた。 *1：ステインズビー・ジュニアの時代（1720-50年頃）は、この音が大変出しにくい。 *2：歌口を外側に廻して強く吹く。
従って、ここでもある程度#、bと分けて記すことにした。但し、#、bとも指使いが1つしかない場合は、しかし、IIの指使いで少し歌口を外側に廻して息を調節して吹けば鳴る。
この限りでない。